

8 集中・注目のさせ方

聞き漏らしを無くし、学習に集中させるためには、注意を喚起し、児童生徒自らが対象に意識を向けることが大切です。

それには、不注意な児童生徒にその都度、個別に注意を促すのではなく、何より本人の「聞く構え」を育てることが重要になります。

具体的には、①注意を促す指示や合図が明確であること、②ルール化すること、③自ら意識が向けられた時を逃さずにほめること、④授業そのものが魅力的であること、などが挙げられます。

1 注意を促す指示や合図が明確であること

(1) 注意の喚起

児童生徒の注意を引きつけるには、以下の4点に留意しましょう。

- ① 注意を喚起し、② 視線を引きつけ、③ 一旦、手を止めさせ、④ 姿勢を直す



- ① 「はい、注目」
- ② 「顔を上げて、先生の方を向きます」
- ③ 「鉛筆を置いて、手をひざに置きます」
- ④ 「背筋ピンと伸ばしましょう」

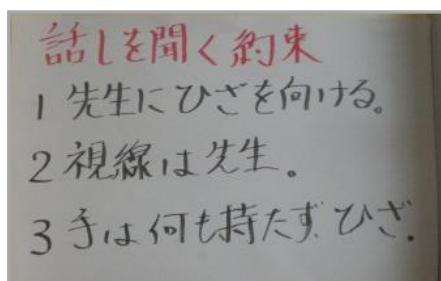


図 8-1 掲示「話を聞く約束」



図 8-2 「話は『聞く構え』ができてから」

<ユニバーサルデザインの視点>

「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」

「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」

→一度に複数の情報処理は誰にとっても優しいものではありません。今、重要となる情報源に児童生徒自ら注意を向けることで集中して、情報がキャッチできるのです。

(2) 場面や教科ごとの工夫

ア 教室一般

机の上に余計な物があると集中力が欠け、注目の妨げになる可能性があります。話を聞く構えを作る環境設定として、**不必要な物は机の上に置かずに片付けさせる**ことです。

イ 理科室や技術室、家庭科室などの特別教室

一つのテーブルにグループで座る特別教室の場合、教師の話を書くときは、何も手に持たせず、教師にひざを向けさせます。こうすることによって、先生の話を中心して聞くことができます。

ウ 体育や学年集会

話を聞く約束として、体育座り（ひざを抱えて座る）をして、つま先を話している相手に向けさせます（図 8-3）。



図 8-3 「話を聞く姿勢」

(3) 一斉指示は「同じ立ち位置」で話す

一斉指示を出す場合、必ず同じ立ち位置で話をするようにします。



机間指導の最中に教室後方から補足・追加の指示を出すことは避けましょう。

児童生徒にとって、誰に向けて話し掛けているのかわかりにくく、自分から注意を向ける構えが作りにくくなるからです。結果、聞き逃しが多くなります。

指導が積み重なると、教師が教壇の定位置に立つだけで児童生徒は、「話を聞く場面だ」と理解し、教室が静まるようになります。

2 ルール化する

注意・集中が必要な場面で児童生徒自らの判断で「聞く構え」を作り、その時に適切な行動ができるようにする手立てとして「ルール化」があります（p.00「3 ルールの確立」参照）。

**聞く時は聞く
書く時は書く**

- ・教師の話を書く時は、聞くことに専念する（その間は、板書を取らない）。
- ・板書が終わったら、筆記用具を置く（それまでは次の説明に入らない）。

3 自らの気づきを育てる ～意識が向けられた時を逃さずにほめる～

必要な時に自分から対象に意識を向けることができる。これは、とても大切な指導です。

環境設定だけでなく、教師の関わりがポイントです。気づく状況を整え、「できた時」を逃さずにほめることです（図 8-4）。

授業開始の挨拶の時、いつまでもお喋りが止まらないA君



先生:「うるさい！ 静かにしなさい！ 何度言ったら分かるの！」(叱)

先生「はい、鉛筆を置いて、先生に顔を向けましょう」(注意を喚起)

児童:(まだ数名が、お喋りを続けている)



先生「……(沈黙、全員が注目するまで待つ)(児童の気づきを待つ)

「C君、黙ってしっかり前を向いているね！」(できている児童を指摘)

「Bさんもいい姿勢ですね。背筋がピンと伸びている！」

A君:(次第に静まっていく雰囲気とほめられる友だちに、ようやくここで気づく)

先生「おっ、A君も集中できているね！」(できたことをほめる)

図 8-4 「気づきを促す関わり方 (例)」

4 授業そのものが魅力的であること

集中しやすい環境を整備や視聴覚に訴える教材の有効活用は、授業のユニバーサルデザインにおいて大切な要素です。

しかし、最も大切なのは授業そのものが魅力的で、児童生徒が面白いと感じられることです。そして、「分かった」「できた」という手応えが得られること。これこそが本当に授業のユニバーサルデザインといえるでしょう。

授業に興味を持たせ、児童生徒の授業への参加を促すポイントは、「10 参加の促進」の項を参照してください。

～沈黙もメリハリの一つ～

教師の声はずっと流れている教室。あるいは「ハイ、ハイ」という挙手をしながらアピールをする声が絶え間ない授業。一見「活気ある授業」にも思えますが、果たしてそうでしょうか。視点を変えると「メリハリの無い授業」とも考えられるのではないのでしょうか。

例えば「3分間黙って作業します」とか「3分経ちました。できた人は黙って手を挙げなさい」など、静かに行動させ沈黙の時間を確保した上で、分かったことや自分の意見を明確に話させます。そうすることで、授業中の「音」に静と動のメリハリが出ます。

話を「聞く」ことを重視するには、そのコントラストとして音が消える「沈黙の時間」があることも必要です。「静」が確保できるからこそ、元気に答える場面、「動」としての教師の話がより引き立つのです。

<特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果>

ADHD（注意欠陥多動性障害）は、「多動性」「衝動性」「不注意」の3つを主な特性です。症状の現れ方には、3つのサブタイプがあります。

- ①多動性・衝動性と不注意を伴う「混合型」、
- ②多動が目立たない「不注意優勢型」、
- ③じっとしていられない「多動・衝動性優勢型」です。

①と③の多動性の傾向のある児童生徒には、授業の始まりに姿勢を正すあるいは教科書ノート等の学習用具を隣席同士で確認するなど「体の動きを伴う指示」を出すことも効果的です。これらのことは学習のルールとして、学級内の児童生徒に明確に伝えておく必要があります。

すべてのタイプに、「聞き漏らし」や「取りこぼし」などの行動上の問題が現れやすいのですが、そのことを「叱責」するのはかえって逆効果です。注意を促す効果的な指示や合図を決めておき、注目させ、出来たことをほめ、強化することが大切です。言葉の指示だけではなく、板書、身振り、その他の多角的な情報をあわせて伝えるとより効果的です。

また、当たり前に行っていることでも、評価されなくなると次第にその行動は減ってしまうので、出来ていることは適宜ほめて、継続させることが大切です。特に自ら注意が向けられた時を逃さずにほめることが大切です。そのような状況を意図的に作り成功体験と称賛される体験を出来るだけ多く体験させたいものです。

応用・発展

～特別支援学級や特別支援学校での活用例～

1 姿勢を整える

手型を机の上に貼ることで、手の置き場所をはっきり示すことができます。「～をやめなさい」や「手を止めなさい」といった指示よりも「手を机に置きなさい」の方が、児童生徒にとって具体的で行動に移しやすい指示と言えます。



図 8-5 「手を置いて、注意を向ける」

2 注目を促す教材の提示と教師のポジショニング

「パペット」などの人形を活用することも、子供の注意を引きつける有効な手段の一つです。その良さは、①キャラクターの親しみやすさ、②動きと声で視覚・聴覚の両方に働きかけられる、③児童生徒と教師の間に教材（パペット）を位置することで、児童生徒の視線が教材に正しく向けられているか確認できる、などが挙げられます。

特に③は、共同注意がアイコンタクトの段階から受動・応答的な段階の児童にとって、視線の共有を促す最適な教師のポジショニングと言えます。



図 8-6 「パペットで視線を引きつける」

3 興味のある教材・活動

児童の興味に基づいたデザインに教材をアレンジすることで意欲を引き出します（図 8-7）。電子黒板はプロジェクターと異なり、直接画面に触れて操作できるメリットがあります。



図 8-7 「興味に基づいた教材づくり」



図 8-8 「電子黒板の活用」

～共同注意～

共同注意（joint attention）とは、大人と子供の両者が同じものに注意を向けて、心の交流を深めている状態を指します。例えば、子供が絵本の猫を「ニャンニャン」といって指さし、大人が「ニャンニャンだね。かわいいね」など応答する場面がこれにあたります。

共同注意は、意図や情動、コミュニケーションなどの発達の基盤となります。自閉症の児童の指さしが乏しいのは、この共同注意が困難であるためと考えられます。

共同注意の発達は、①対人的なアイコンタクトの成立、②指さしや声かけに反応して大人が見ている対象に子供の視線を合わせる、③子供が自分から他者と注意を共有するための、自発的な指さしや物の提示ができるようになる、という段階をたどります。